

作家「太宰 治」夫人 石原美知子着任



戦前の都留高女の校長としての重要な仕事に「いい先生」を集めることがあった。都留高女の大武美徳はその意味でも名校長だった。昭和八年八月四日に一人の女教師が着任した。大武が要請して招いた人だ。名を石原美知子と言った。のちの太宰治（本名・津島修治）夫人である。

石原美知子は明治四十五年一月三十一日、石原初太郎・くらの四女として島根県那賀郡浜田町に生まれ、甲府市水門町で育った。初太郎は東京帝国大学地学科を卒業、東京鉱山監督署、盛岡鉱山監督署などに勤め、山口県豊浦中、島根県立第一中、同第二中、山形県立

米沢中の校長を経て、広島高等師範学校地質学教室講師を最後に退官。山梨県嘱託として地質、動植物の調査研究、景勝地開発事業に従事していた。

石原は甲府高等女学校から東京女子高等師範学校（お茶の水女子大の前身）国文科に進み、八年三月に卒業した。都留高等女学校では地・歴（地理と歴史）の教諭として教壇に立ったほか、学級主任、排球（バレーボール）部の副顧問や舎監を務めた。

石原は着任について「大武先生じきじきのお話でした」と言う。新任の石原の目に大武は敏腕といってもいい校長と映った。「大武先生は四十歳そこそこの若さで、若いだけにいろいろな新しい試みをしておられました。甲斐絹の産地だからと、通学に使う雨傘を木綿の傘地から、郡内産の絹傘地へと切り替えられました。実際に紺色の傘

をつくったように記憶しています」

石原が着任した時、大武はちょうど四十歳だった。甲府高等女学校で学んだ石原にとって創立十周年記念式典を挙行したばかりの都留高等女学校は、「歴史が新しい学校で、伝統にとらわれない良さがある」と感じられた

「生徒はおとなしい方が多かったような気がします。東は八王子、西は勝沼あたりからと、ずいぶん遠くから通学してきていました」と生徒の印象を語る。

寄宿舎の舎監は着任二年目の昭和九年十五日から務めた。寄宿舎は校舎の西側にあった。敷地も広く、大きな寄宿舎だった。平屋の一棟には炊事場、食堂、ふろ場などが入っていた。二階の棟に生徒と教諭が住み、階下に生徒が、二階に教諭が泊まった。 賄いのおばさんが一人いて、上級生が一週間分の献

立をつくり、当番の生徒がおばさんを手伝った。夜は七時から九時の学習の時間が終わると舎監である石原と生徒が一日を振り返って話し合った。寄宿舎にはもう一人の教諭と交代で一週間おきに泊まった。石原は次のように言う。

「私が舎監をしていた当時は寄宿生が少なく、大武先生は『寄宿舎生があまりいなくなると廃される』と心配されていたようです。存続ぎりぎりの生徒しか入舎していませんでしたのでしょう」

生徒から見た石原は、つましい先生だった。排球部員で十二回卒業生、北都留郡上野原町恋塚の主婦、大庭（旧制・富田）稲子は「つまましいという言葉そのままの方でした。あまり際立った表現はされないのですが、温かみがあり、生徒に慕われていました。私は石原先生の書かれた原稿を学芸会発表したのを覚えて

います」と言う。 同期の大月市梁川町綱ノ上の主婦、斧窪（旧制・倉田）ふさ子も「つましく、しとやかな方でした。しかし、しんは強く、情熱的な方だったと思います。肌がとてもきれいな先生でした」と石原の内に秘めた情熱を語る。

舎生であった同期の東京都立川市柴崎町の主婦・中山（旧制・永島）峯子は「きちょう面なキリツとした先生でした。髪はひつひつめ、いつも着物を着られ、紺のはかまをはいておられました」と言う。

石原は十三年九月十八日、太宰と見合いし、同年十二月二十四日付で退職した。五年余りの教職生活であった。太宰との結婚式は十四年一月八日、杉並区清水町の井伏鱒二邸で井伏夫妻の媒酌のもと行われた。太宰二十九歳、石原二十六歳だった。二人は甲府市御崎町に新居を構え、同年九月に

は三鷹の下連雀に移った。石原は人生の唯一の教員生活振り返り、次のように語っている。

「国語の授業を持ちたかった。地・歴で終始したのが残念です。国語ですと、古典にしる、現代国語にしても授業を通して生徒と心が触れあえます。地・歴は知らない土地のことを知ったかぶりして話さなければなりません。地・歴の教員が少なかったため、地・歴の担当となったのが非常に心残りです。石原は太宰の生活、そして家庭を支えた。 二女の里子は作家・津島祐子として活躍している。

この記事は山梨日日新聞 社出版の「同窓都留高のあゆみ」を参考に引用転載したものである。 執筆者 山口善久